
どっぺる！？

氷純

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

どっぺる！？

【Nコード】

N0121BA

【作者名】

氷純

【あらすじ】

自称天才（男）が生みだした自身のクローンは……女の子？

数々の発明品を持つ少年とそのクローン少女が巻き起こすコメディ。

何故、娘が？（前書き）

不定期掲載です。

何故、娘が？

何だこれは……？

俺は培養機の蓋を開けてそこにいた生き物に愕然とした。

天才であるが故に人に理解されず孤独に過ごしてきた人生、それに終止符を打つ最終兵器を生み出したはずだった。

だがしかし、何だこれは？

培養機の中には天才たる俺を理解できる唯一の存在、つまり俺自身のクローンが入っていないなければならないのに……。

何だこれは！？

いや、混乱している場合ではない。俺は失敗したのだ。その現実を受け入れ原因を究明すべきだ。そう考えた俺は培養機の中に居るそいつを観察する。

若干のウェーブがかかった髪と俺を見上げる瞳は艶やかな黒、日に焼けたことのない肌はきめ細かい粉雪を思わせる。理知的なその顔を見間違えるはずはない。

どう見ても俺だ。それ故に納得がいかない。

「何だ、これは？」

俺のクローン、つまり男にはないはずの胸の膨らみに眉を顰める。身長に比して慎ましやかではあるが確かに膨らんでいる。

体格スキャンの過程で間違えたか。だがよく見れば顔立ちもどこか丸みがある。

「ホルモンバランスか！」

ホルモンバランス調整器はこいつの後ろにある。男性ホルモンを注入するチューブが詰まっているのかもしれない。

俺は裸のそいつを培養機から引きずり出して中を調べる。

「イーピンポーン」

この忙しい時に玄関チャイムを鳴らす空気を読めない馬鹿は何処のどいつだ。無視だ無視！

俺が培養機の中に座り込んでチューブを点検していると後ろからそいつが声をかけてきた。

「らい客ですか？」

生まれたばかりで話すことに慣れていないせいか発音が怪しかった。

「今は手が放せない。代わりに出てくれ」

集中していた俺が振り返りもせず頼んだ事に怒りもせず、そいつは部屋を出ていった。

日常会話に困らない程度の言語力や社会常識をインプットしていたのが思わぬところで役に立った。

こういった抜かりの無さは流石に天才の俺である。等と自画自賛している場合ではない。チューブに異常が見当たらなかったのだ。

「原因は別にあるのか」

原因を考えるべく腕を組んでいると、階下から聞こえてくる声に聞き覚えがあるのに気が付いた。俺の記憶が正しければ段々と語調が荒くなっていくその声は幼なじみの佐奈だろう。

「あのーったいー!!」

何かを叫ぶ声に一瞬遅れて階段を駆け上がる音がした。

……やれやれ、またか。

俺が培養機から這って出ると同時に扉が激しい音を立てて開かれた。

「おい、佐奈。精密機器があるから埃を立てるなと何時も言ってる」

部屋に入ってきた幼なじみに向かっての台詞は最後まで紡げなかった。佐奈の拳が俺の腹に叩き込まれたのだ。反動で強制的に立たされるほど強烈な一撃。部屋に入るなり滑るように距離を詰めると共に腰を捻りながら上体をかがめ、螺旋を描いて俺の鳩尾を抉った右ストレート。完成されたそれは達人の域だった。

「ぐう、腕を上げたな、拳だけにー」

「黙れ変態！」

俺に罵声を浴びせながら繰り出された佐奈の回し蹴りが俺の頭を激しく揺らした。繊細にして流麗な重心移動と最大の遠心力が織り成す体重が乗ったその一撃はもはや神業と呼ぶに相応しい上段回し蹴りだった。

「足を上げたな、上段だけに」

「冗談言ってみました。上段きついで。」

「この頭の回転、やはり俺は天さ……。」

俺の意識はそこで途切れた。

原因は？

妙に柔らかで温い枕の感触が頭を包んでいる。佐奈に蹴られて意識が飛んだから寝かされているのか。

「気がツキましたか？」

瞼を開けるとクローンの声が降ってきた。ささやかな胸の膨らみを越えた真上から……。

「クローンに膝枕されたのは俺が初だろうな」

いやはや、なかなかどうして、感慨深いものがある。

クローンを見上げながら俺は思った。

俺のシャツを着ているのは高ポイントだ。少し大きめのシャツ、その長い袖を持って余し指だけ出ているのが良い。非常に良い。

惜しむらくは顔が俺とそっくりな所。見慣れているからか、異性と認識しにくい。

若干の感動に胸を熱くしていると何処からか殺気が漂ってきた。出所を探すと拳を握っている佐奈がいた。

「起きたなら言い訳しろ。このど変態」

閻魔が腰を抜かしそうなほど素敵な笑顔で命令された。

言い訳なんか聞く気も無いくせに。

「寝た振りすんな！」

諦めて自らの冥福を祈ろうとした俺の襟首を掴んだ佐奈がガクガ

ク揺さぶってくる。

って言うつかやばい。三半規管がピンチ。吐き気がしてきた。

「第一、何で私を出迎えるのが宗也じゃないの？ 何でそっくりさんが出てくんの？ 何でそっくりさんは裸なの？ あんたら一体何してたの！？」

俗に言う質問責めであ……うぶ。

「顔が青くなっています。吐かないように食道を押さえた方がイイです」

ちよっ……。クローン何言ってるの？

「じじい？」

気道も絞まってますって！ 息が苦しい。吐き気と併せて二重苦だよ！

「もっとじじい。キュッと」

クローンさん何ジエスチャー加えてんの！ その擬態語すごく怖いよ！？

俺が必死に暴れて首が絞まっているとアピールした甲斐があつて佐奈はようやく俺を放してくれた。

「大丈夫ですか？」

クローンが俺の背中を撫でて労ってくれる。半分くらいお前のせいだけだな！

「で、説明は？」

佐奈が睨んでくる。

「こいつはさっき生まれたクローン」

さっき、でいいんだよな？ 気絶してたから意識と一緒に時間が飛んでるんだが。

「何で裸か聞きたいのよ」

身元確認が先だろ普通は。

だが、佐奈に理屈が通じない事くらい知っている。

「生まれたばかりだから服を着ていなかったんだ」

そういえば、最低限の社会常識がクローンの頭には入っていたはずだ。なぜ裸で来客対応なんかしたんだ？

不思議に思っただけで本人に尋ねると意外な答えが返ってきた。

「来客には服を着て対応シなくてはイケないとは知りませんでした」

「ああ。当たり前過ぎてインプットし忘れてーくはっ」

「お前のせいかなぁぁぁ！」

俺の脳天を揺らす佐奈の右フックに意識が飛びかける。

この最高の頭脳を内包する素敵に格好良い入れ物をいささかの躊躇もなく殴りつけるのはモノの価値が分からぬ女だ。

「かなりムカつくこと考えてるみたいだけどまあいいわ。それで、

「この子は宗也のクローンなのに何で女の子な訳？」
「問題はそこだ」

俺のクローンであるからには男である筈なのにこいつは間違いなく女だ。

決定的なところは見てないがー

「どこ見てんだ、変態」

佐奈の怒気に気付いて慌てて向き直る。

俺は咳払い一つして仕切り直すと説明を始めた。

「これは仮説だが、遺伝子の問題だと思っ」

人の性別はXとYの二つの遺伝子で決まる。Xが二つ揃っていれば女性、XとYが一つずつで男性になる。

「と、ここまででは高校の生物の授業で習っな」
「私達まだ中学生でしょ」

俺は予習してんの。

それに来月から高校生だしな。

「けど、何となく分かったわ」

そう言っって佐奈がクローンを指差し、

「この子は宗也のX遺伝子だけを複製してXが二つ揃ったのね」
「察しがいいな」

まだ検査はしてないから仮説の域を出ないものの、俺は自信があった。

クローンは自分の事だというのに無表情で頷いている。そこで佐奈がふと首を傾げた。

「うん？ それじゃ、この子は宗也のクローンというより……。」

佐奈の言葉の続きを想像した俺は心底ぞっとした。そんな俺の心境を露とも知らない佐奈は納得顔で手を打った。

「宗也のお母さんのクローンよね！」

せ、セーフ……。

俺は胸をなで下ろす。

佐奈が科学を苦手としていて助かった。真相を知ったらまた拳が飛んでくるに違いない。

安堵感に胸を一杯にしている俺はクローンが佐奈の発言に首を振った事に反応が遅れた。

「佐奈さん、この場合はクローンでは無く宗也さんとお母さんの」

「わああわああ！ 君は何で爆弾発言しようとしてんのかなあ!？」

慌ててクローンの言葉を遮って詰め寄る。

純真無垢すぎてお父さん心配よ!？」

クローンは事態が飲み込んでいるのかいないのか全くの無表情。

佐奈は俺に疑うような視線を向けた。

「と、とりあえずはこのクローンの名前を付けておこうと思うけどうだ?？」

早口で話をすり替えた俺を佐奈はまだ睨んでいたが、クローンが俺に同意したので渋々賛成した。

「宗也は元からクローンを創るつもりだったんでしょ？ 名前くらい予め考えときなさいよ」

「考えてあつたさ。だが、女に付ける名前じゃない」

「因みに、何と付けるつもりだったのですか？」

「……宗介」

クローンに訊かれてぼそりと答えた名前に佐奈が呆然と口を開けた。

「……だ、誰が考えたの？」

「俺に決まってるだろ」

「そんなはずない！ 幼なじみを騙そうだったって無理よ!？」

激昂した佐奈が叫ぶ。クローンは無言かつ流麗な動作で耳を塞いだ。

「あんたが付ける名前なんて昔からエンジェルブラッド天毒血とかダイクネスアルト暗黒音つて訳わかんないやつじゃない！」

「止めるっ。その名を大声で口にするなあ!!」

厨二病だったんだよ。幼なじみなら察しろよっ。卒業式は済ませたんだよ！ 厨二病に未来は見えないの!!

しかも悲しいことに佐奈が口にしたのは俺が特許申請した発明品あるいは商標登録した商品の名前だ。

近頃、世間様の視線が痛い。知ってるか、視線で人を殺せるんだぜ？

「……落ち着きましたか？」

さんざん言い争って、肩で息をする俺達にクローンが言った。

書記って誰？

「佐也香、準備できたか？」

名前を呼びながらクローンの部屋をノックする。
押しの強い母によって流行のキラキラネーム（金星とかそんなの）^{キラナス}に決まりそうになったが、常識人である佐奈の徹底抗戦によりクローンの名前は佐也香に決まった。

佐奈と俺（宗也）の名前から一字ずつ取ってあるのには作為的な何かを感じるのだが、佐奈に聞いてもはぐらかされるだけだった。
男の俺では気が回らないことまで面倒を見てもらっているので強くは聞けずに高校入学の今日を迎えた。

「佐也香？」

返事がないのでもう一度ノックする。

佐也香のやつ、未だに羞恥心を身につけていないからな。許可無く開けたら下着姿だったり、報告を受けた佐奈に殴られたりするの
はもう嫌だ。

この半月は生傷が絶えなかったぜ……。

あれ、おかしいな。体の節々が痛い。またフラッシュバックか？

「できました」

佐也香が扉を開けて出てきた。

しっかりと制服を着ている。ぱっと見は問題がない。

「念のために聞いておくが、下着はつけているな？」

スカートをめくる訳にもいかないのでセクハラ染みた質問をする。佐奈がこの場にいたら俺の傷が増えていただろう。

「……………」

廊下に出ようとしていた佐也香が足を部屋に引っ込めて無言のまま扉を閉めた。

「忘れてたのか……………」

佐也香の高校入学に必要な書類を金や力や情報で揃えるのに掛かり切りだったので、本人の教育に時間を割けなかった。

よって、この有様である。

あまりにも当たり前すぎることを俺がインプットし忘れており、男を想定した教育プログラムの弊害で女としての自覚も薄い。

一応は佐奈が色々と教えているので最低ラインには達して――

「これですか？」

突如開けられた扉。

佐也香が右手に掲げた物を見て俺は即座に引つたくる。

「これは俺のパンツだ！」

見あたらないと思ったら佐也香が持ってたのか。

男物と女物の区別もつかないとは……………」

多難な前途を憂いて俺は天井を仰いだ。

俺の心配をよそに佐也香は玄関に歩き出す。

「ちゃんと靴を履けよ」

背中に声をかけると彼女は肩越しに振り返って頷いた。
俺も靴を持って後に続く。

我が家の玄関は余裕がある造りなので佐也香の隣に座って靴を履いても窮屈に感じない。

玄関扉に手をかけた俺は佐也香を促そうと振り返り、彼女の手元を確認してすぐに制止する。

「おい、下駄を履いていく気か？」

俺の問いかけにキョトンとした顔を向ける佐也香。

「ダメでしょうか？」

「お前の靴はこつちだ」

靴箱にあった佐也香のローファーを取り出すと彼女は両方を見比べて首を捻る。

「下駄の方が音が楽しいです」

……ローファーの靴底にカスタネットでも仕込んでやろうか？

名付けて、ダンシングゲー

いかん、ぶり返すところだった。

「どうかしましたか？」

ローファーを履いた佐也香が訊ねてくるのを適当にいなして、玄関扉を開く。

佐奈が靴を片手に待っていた。

「二人ともおはようーって、宗也は何で防御姿勢をとってんのよ」
「理不尽な暴力から逃れるためだ」

顔の前で縦にそろえた腕の間から答える俺に佐奈はため息をこぼす。

「佐也香、大丈夫だよな？」

やっぱり、佐奈も下着の心配するんだな。

「……………」

「見せなくていいから！」

スカートの裾を持ち上げる佐也香を佐奈が慌てて止める。

「白か」

純粋な佐也香に似合っている。

黒の下着でも肌の白さが強調されて良いかもしれないが、佐也香にはやはり白が適切だろう。

早い話が眼福である。

「……………宗也、今なんて言った？」

やばい。口に出しちゃってた。

佐奈が笑顔で詰め寄ってくる。

ふっ。だが、この俺の鉄壁のガードは破れまい。

そう思った瞬間には形のいい拳が眼の前に制止していた。

「えっ……………？」

「宗也は新入生代表だから今日は許してあげる」

拳を引きながらにつこりと微笑む佐奈に唾然とする。まるで動きが見えなかった。

俺のガードもちゃっかり弾かれてるし。

愕然とする俺に不敵な笑みを見せた佐奈は拳を引いて、佐也香の手を取った。

「遅刻する前に行くよ」

歩き出す二人の背中を追いながら、俺は空に祈った。

どうか、佐奈とは別のクラスになりますように。

暴力に怯える生活はもう嫌だ。

校長室に通された俺は頭を下げ、挨拶を述べた。

「よ、よく来たね。えっと、そうだ。ご入学おめでとう」

白髪のナイスミドルが上擦った声で歓迎してくれた。

引き吊った笑顔を浮かべる彼に教頭らしき男が同情の視線を送っている。

「校長先生、緊張なさらないで下さい」

落ち着かせようと笑顔を向けたが、校長の顔が青ざめるだけだった。

そんなに怖がらなくても良いだろうに。
キャバクラ通いなんて今時恥ずかしいくもない。

「奥さんはお元気ですか？」

「ああ、お陰でな。仲良くやっているよ」

恥ずかしくなくても恐いんだね。奥さんとか世間の目とか。
教育者は大変である。

「佐也香さんだったか。妹さんは息災かね？」

「お陰さまで本日入学の運びとなりました」

そうでないと言わしー交渉した意味がないからな。

「ところで、式の流れを確認したいんですが、変更はありますか？」
含みのあるやり取りを済ませて本題に移る。
リハーサルも昨日済ませたので変更など無いと思っていた。

「それが、生徒会長の系澄さんがまだ登校していなくてな」

困った顔で校長が言う。

生徒会長と言われてぼんやりと思い出すのは眼鏡の先輩だ。
小動物チックな大人しい人だった。何かの罰ゲームで会長になっ
たんじゃないかと心配してしまう程に頼りない印象の女子生徒だっ
た。

入学式をすっぱかす度胸があるとは思えない。

「遅刻しているだけでしょ。もし来なかったら副会長が代わりを
やるんですか？」

会長と正反対の雰囲気を持つ優男な男子生徒を頭に浮かべながら訊ねると校長は首を横に振った。

「彼も来てなくてね。今朝、糸澄さんと歩いている姿を見た生徒はいるが、連絡がつかない」

ゴシップ記事の匂い！

冗談はさて置いて、代役無しか。別にプログラムをとばしても構わない気はする。

「代わりは書記の形蔵さんが務める」

誰だよ。

流石に書記の顔まで覚えてない。

「因みに、君と同じ一年生だよ。中等部から生徒会に入っているからね」

中高で一つの生徒会を運営していると聞いてはいたが、こんな事態にもなるのか。

同じ新入生、今日は主役だというのに歓迎役まで兼任とは、可哀想な奴である。

「それで、形蔵さんとやらは何処に？」

この天才に挨拶もないとは、恥ずかしがり屋さんめ。さして広くもない校長室に俺以外の生徒はいない。

となりの生徒会室にいるのだろうか。

そう思って壁をなんとはなしに見る。

物言わぬ白い壁が立ちふさがっていた。

「形蔵さんは生徒会室にいるよ。緊急で台本に目を通しているからそつとして置いてほしい」

校長が眉を八の字にして言った。

がんばる孫を応援するような口振りなのは、校長の名字も形蔵と
いうのが関係しているのだろう。

……十中八九、孫だな。

俺は壁に向い手をメガホン代わりにして口を開く。

「校長の行き着けはー」

「喋るな！」

威勢の良い台詞と裏腹に縋ってくる校長がうるさいのでメガホンを解く。

「孫の晴れ舞台を作るべく生徒会長並びに副会長を誘拐するとは何たる事か。校長よ、見損なつたぞ！」

「唐突に濡れ衣とな!？」

「ええい、黙れ! 証拠なんぞ三時間で揃えてみせる。大人しく縛につけえい!」

「揃つとらんじゃないか! 見切り発車でトンでもないことを言い出すでないわ!」

年甲斐のない言葉の応酬に校長は息を切らしている。

しかし、その顔は若い輝きに満ちていた。

「やるな、校長。これが年の功か」

「ふふふ。若い者のボケ程度、的確にツッコミを入れてみせるわい」

校長は生涯を賭けて倒すべきライバルに出会ったような満足げな顔で握手を求めてくる。

俺はそれを受け、固く固く握り込んだ。

結論、この校長《爺さん》は悪乗りし易いバカだ。

俺が居る！？

渦巻いていた。淀んでいた。負の感情がたゆとう控え室には発生源の少女がうなだれていた。

「なんで、私がこんな目に遭ってるんですか……。。」

両手で持った原稿が軽くひしゃげた。投げ捨てたい衝動を抑えているようだ。

俺は声を掛けるべきか悩みながらも少女の肩に手を置いた。そろそろ彼女の出演である生徒会祝辞が始まるからだ。

「人前に出る仕事は無いってみんなが言うから書記を引き受けたのに、なんでこんなもの読まなきゃいけないんですか……。生徒全員どころか保護者や市長まで居るじゃないですか。よりもよって私に代役を頼まなくてもいいじゃないですか！」

結局、生徒会役員で登校したのは書記である彼女、形蔵詩波だけだったのだから仕方あるまい。

だから、俺を恨めしそうに見るのは筋違いだ。

「さつき校長の話が終わった。出演だ」

無慈悲に告げた俺に形蔵は何故か怪訝な顔をした。

「私の出演は新入生代表の後ですよ？」

「え？」

こいつ現実逃避してやがるのか。

呆れてため息を吐いて見せると形蔵が不愉快そうに唇を尖らせた。

「私が原稿の内容をまだ覚え切れていないから順番を変えたんですよ。ほら、これ」

差し出されたのは入学式の内容が書かれたパンフレットだ。

確かに、新入生代表と入れ替わっている。

……ということは今、俺の順番じゃないのか？
慌てて舞台に目を凝らす。

「舞台に俺が居る!？」

なに言ってるか分からねえと思うが俺も何をされたか分からなかった。

しかも舞台の俺はスカート姿じゃねえか!

何がどうしてこうなった!?

混乱する俺の横で舞台を覗いた形蔵が感動したような吐息を漏らした。

「双子ですか。一卵性は初めて見ました」

は？ 双子？

疑問が頭を乱舞し、俺は結論に至った。

「……佐也香!」

あいつ、何してやがる。

原稿も無しに新入生代表やるつもりか？

今すぐ舞台に飛び出すのはまずい。式が台無しになる。

台本を基にカンペを作るか？

いや、駄目だ。舞台端に視線をやるタイミングがない。保護者達
の後ろで掲げても離れすぎていて読めないだろう。

焦る俺とは対称的に舞台上の佐也香はのんびりと構え、講堂を見
回している。

大物だ、しかし全く安心できない。あれが嵐の前の静けさに思え
てならん。

司会役を務める教頭が俺たちの入れ替わりに気付かず式を進める。
というか、気付けよ。舞台の俺スカート穿いてるじゃねえか！
いや、俺じゃない。佐也香がスカートなんだ。

「もう訳わかんねえ……。」

頭を抱えてしゃがみ込んだ瞬間に打開策を閃いた俺は転がるよう
に部屋を出た。

制止をかける形蔵に構わず、目指すのは上にある放送室だ。

佐也香が話を始める前にマイクの電源を切り、放送室から俺が原
稿を読み上げてしまえ。

舞台近くの生徒は気付くだろうが大きな混乱は生まないはずだ。
肩で息をしながら放送室の扉を開ける。

「な、なんだ!?!」

「君、いま舞台に……あれ?」

悠長にノックしてられないので勢いそのまま侵入してきた俺に音響
担当の先輩が驚いている。

制御板に飛びついた俺は即座に舞台マイクの電源を切った。
間に合った。

胸をなで下ろした直後、講堂を割れんばかりの拍手が満ちた。
不思議に思っただけで舞台を見下ろす。

佐也香が一礼して舞台裾に消えていった。

……放送室まで二分と掛かってないんですけども。

なんで佐也香は出番が済んだとばかりに舞台裾へと吸い込まれたんでしょうか？

生徒や保護者が感動の涙を流してるのは何故？

佐也香ちゃん、何してくれんてんの！？

「もう、本当に訳わからん……。」

俺は頭を抱えてへたり込んだ。

—————

舞台裾で校長と話す佐也香を見つけた。

舞台上では極度の緊張に固まっている形蔵がいる。

不安げにそれを見る校長が一方的に話しており、佐也香は無表情で相槌を打つだけだ。

俺はそんな二人の前に回り込む。

「佐也香、ちょっと聞きたいことがあるんだが、覚悟は出来てんだろっな？」

校長が俺達を見比べて感嘆の声を漏らした。

「君が佐也香ちゃんか。瓜二つじゃないか」

「俺が宗也だ！」

この爺さん、まさか勘違いしたまま話してたのか？

というか何で誰もスカートとズボンの違いで見分けようとしな

!?

「宗也さん、そんなに慌ててどうしました？」

君が原因です。察してくれ……。

泣きたくなってきた気持ちを深呼吸で押さえつける。

「佐也香が新入生代表をやったのは何故だ？」

無理に落ち着いて訊ねる。まずは経緯の把握からだ。

「そこのお爺ちゃんに引っぱられて、何時の間にか舞台に立ってました」

「校・長」

笑顔で振り返る。

弛みきった顔で孫に小声の声援を送る爺さんがいた。

どう料理してくれようかと指の関節を鳴らす俺を佐也香が止めた。

「ーというのは嘘です」

この流れでお茶目さんだと!?

「落ち着きましたか？」

「むしろ興奮したわ！ それっばい嘘吐くんじゃありません!!」

一瞬、信じちゃったよ。校長の夫婦関係を台無しにする方策とか考えたよ。

「それで、実際の経緯は？」

「校長に引っぱられて何時の間にか舞台の上にはいました」

それさっき聞いた……嘘じゃなかったようだ。

「落ち着きましたね」

「うん、まあね……。」

興奮を振り切って呆れちゃったからね。

脱力感に苛まれた俺は、それでも何とか気力を振り絞る。

「それで、佐也香。舞台で何をしたんだ？」

感動で涙を流す人がいたり席を立てて惜しみない拍手をしていた人がいたけど、佐也香がああ短い時間で何をしたのかは分からない。どうやればあんな空気を作り出せるのだろうか。

「校長のお話が長かったので短歌を詠み、式の時間を調整しました」

「ああ、短いわけだ」

短歌だしな。

「つて、納得できるかああああ！」

しかし、文句は言えん。

感動の渦を巻き起こしたのだし、情緒もある。結果を残している以上俺は何も言えない。

このやり場のない怒りをどうすればいいんだ。
決まっている。

「校・長」

爺さんの後ろ襟を掴んで引きずる。

「何だね？ 後にしてぐつ！？」

声が漏れないようにしないと。

「じゃあな、佐也香。佐奈が心配するから早く戻れよ」

無表情で手を振る佐也香に背を向ける。

さて、この爺さんにお灸を据えてもらいに行こう。

俺は携帯を取り出して校長宅に連絡した。

……その後、俺まで怒られた。

今まで隠していたから共犯だそうだ。

もう本当に訳分からんね。

俺はふらつきながら教室に入った。

正座で説教を喰らったため脚が痺れている。

この穂波高校では入学したその日に実力テストを行い、その結果でクラスが分けられる。

受かった事に安心して勉強を疎かにする奴がいるからこそその処置だ。

「203番は……ここか」

机の隅に貼られた数字と生徒手帳の番号を見比べて、俺は席に着くため椅子を引く。

前は未だ空席、後ろは机に突っ伏して寝ている茶髪の男子生徒だ。

「……お？ 代表じゃん」

俺が椅子を動かした音で目が覚めたのか、顔を上げた茶髪が声をかけてくる。

君の見た代表とは別人だが俺は確かに新入生代表だよ。

「女子なのに宗也って変わってるよな」

聞き捨てならないその言葉に、俺は制服を見せつける。

「ちゃんと見る。俺は男だ」

「……女装で壇上に出たのか。似合ってたぞ」

「目を逸らしながら言うな。あれは妹だ！」

そして似合っていたと言われても嬉しくない。

茶髪は冗談だと笑いながら手をひらひらと振った。

俺には分かる。こいつはまだ信じてない。

「信じたって。男装が趣味なんだろう？ あんまり似合っていないけど

個性って奴は尊重する男だぜ、俺は」

やっぱり分かってない。

というか仮に男装だとして似合っていないってのはどういう事だよ。

こめかみが疼くのを感じながら俺は口を開く。

「いいか、男装じゃなくて俺は男で、壇に上がったのは妹だ。別人

だつて事は分かるな？」

「分かつてるよ。だがその顔で男なはずないだろ」

茶髪はへらへらと笑いながら続ける。

「妹と顔がそっくりだし一卵性の双子だろ？ 片方が女ならもう片

方も女つて常識じゃん」

「一卵性ではない」

正確には双子ですらない。

「マジで？ 遺伝子強すぎだろ」

今更のようにやぶ蛇だったと気付いた俺は曖昧に頷く。

その後、父母どちらに似ているか等の世間話をする内に入学式の話になった。

「校長が30分近く喋ったからひ弱な生徒が運ばれていたりしてな」

倒れた生徒を思い出してか、茶髪男子生徒、大桂修一の顔に同情の色が浮かんだ。

なかなか良い奴かもしれない。

おそらく、校長の話が長引いたのは孫の詩波が台本を暗記するまでの時間稼ぎだ。

あの爺さん、本物の爺馬鹿である。いろんな意味で。

「それでみんなウンザリしている時に代表があっさりした短歌を詠んで場を閉めたんだよ。カッコ可愛かったぜ！」

グッドジョブ、とばかりに親指を立てる修一。

何度も言うが俺は別人である。

それにしても佐也香の奴、そんな技能を身につけていたとは……。やたらと本やマンガを読みあさっていたのは無駄ではなかったようだ。

流星は天才の俺が生み出したクローン。学習能力も応用力もずば抜けている。

圧倒的ではないか我が遺伝^{ぐん}子は！

俺が妹の成長に鼻を高くしていると茶髪がニヤニヤと口を開いた。

「感動した保護者まで巻き込んでファンクラブが結成されたらしいぜ。よっ、有名人！」

……ちよつと待て。

まさかファンクラブの連中が入れ替わりに気付いてない、なんて事は……。

慌てて修一を問い詰めようとした時、試験官の男性教師が入室した。

注目的？

「宗也はもう帰るのか？」

テストを終えると修一が振り向いて訪ねてきた。

椅子の背もたれに頬杖を突いて茶髪頭を支える彼は鞆を指し示して首を傾げた。

「一緒に帰らないか？」

「妹が心配だから、合流して校内を見て回る」

「シスコンだな。この場合、顔がそっくりだからナルシストでもあるのか？」

「変な定義付けすんな。どっちでもない」

佐也香は未だに社会常識がないのだ。そんなあいつにファンクラブなんか接触したらどうなるか、想像も出来ない。

仮に俺と勘違いされたままだと非常に困った事態になりそうだから、先に合流してしまおうという判断なのだ。

そして、実際にはそうでないにしろ、双子であると周知徹底させるためにも二人揃って校内を散歩してみせる。

そうすれば目撃した生徒が俺達を混同しないように各々で対策を考えるはず。

そうと決まれば善は急げだ。俺が立ち上がると修一も続いた。鞆を肩に掛けて教室を出る。

佐也香たちは別の教室で試験を受けている。その教室に行くには昇降口から遠ざかるのだが、修一が後を付いてきていた。

「帰るんじゃないのか？」

不思議に思つて訊ねると、修一は大げさに肩を竦めた。

「美少女のツーショットつてのはそれだけで貴重なんだよ」

「ツーつてなんだ。ツーつて」

「ツーツー言うな。電話かお前は」

妙な突っ込みと共に背中を押されては抵抗もできない。

他のクラスでも実力テストが終わつたらしく、廊下は生徒で溢れ返っている。それでも立ち止まらずに進めるのは進行方向の生徒が俺の顔を見ると道を譲ってくれるからだ。

廊下の端から生徒達の囁き声が聞こえてくる。

「……代表だ」

「代表のお通りだ」

「道開ける、巻き込まれるぞ」

道を譲つてるんだよな？ 障らぬ神に祟りなし的な言い回しになるのは俺だけか。それに何に巻き込まれるんだ？

「修一、なんか注目されてないか？」

顔を振り向けて訊ねる。

修一はわざとらしく顎に指を当てて真面目に思案するような顔を作った。

「ここで俺が宗也に告白すれば周囲の圧力で断れまい」

「……お前、そっちの趣味が？」

「まて、誤解だ。冗談くらいは受け流してくれ」

咳払いして仕切り直した修一は続ける。

「入学式の一件が尾を引いてるんだろっさ」

物凄い影響力である。舞台上に佐也香が立っていたのはほんの数分だ。俺なら顔なんて覚えられない。それだけ短歌を詠んだのが印象深かったのだろうか。

「おい、宗也。携帯が鳴ってるぞ」

修一に肩を叩かれた俺は携帯がメールの着信を告げているのを知りポケットから引っ張り出す。

佐奈からである。メールを開いた俺は文面を読んだ瞬間、顔から血の気が引く音を聞いた。

「嘘だろ……?」

すぐさま携帯を握りしめて走り出す。

「……おい。宗也!？」

修一の足音が追いかけてくるが今は気にしてられない。

佐奈からのメールには簡潔に出来事だけが書いてあった。

「……佐也香が倒れた、と。」

文字通り血相を変えて走る俺は時々同級生にぶつかりながらも保健室にたどり着いた。

「佐也香!？」

名を呼びながら保健室に飛び込む。

数台あるベッドの内、窓側の一台だけ白いカーテンで仕切られて

いる。

そのカーテンの裾から佐奈が顔を出して唇に人差し指を当てた。静かにしろ、そう言いたいのだろう。

佐奈に手招きされてカーテンをぐぐり抜ける。佐也香が静かに寝息を立てていた。

「貧血みたいよ」

俺が容態を聞く前に佐奈が先手を打った。

「きつと人混みに当てられたのね」

「そういうことが」

思ったほど大事にはなっていないらしい。壁にもたれて安堵の息を吐いた。

詳しい話を聞くと、入学式の一件で話題の新入生代表という事で話し好きな生徒達に取り囲まれたらしい。

「俺か佐奈としかまともに話した事が無かったもんな」

両親は忙しかったため家を空けてばかり。自然と佐也香の話し相手は限定されていたのだ。

「……気付かなかった」

「ま、まあ、仕方がないよ。少しずつ慣らすしかないって」

佐奈がフォローしてくれる。

その時、保健室の入り口から息を切らした男子生徒が現れた。修一である。

「いた。宗也、お前なあ、置いてくつて酷すぎだろ。お前がぶつかった相手に何度頭を下げたかー」

文句を言いながら俺に詰め寄ってきた修一はベッドの上で眠る佐也香に気が付いて一瞬呆けた。

何度か瞬きすると俺と佐也香の顔を交互に見た。

「間違え探しか？」

「この空気でボケがかませるお前は大物だよ」

「いや、和むかなと思ってな」

確かに空気が弛緩していた。

佐奈が視線で「こいつ、誰？」と聞いてくる。

「大桂修一、教室で知り合った」

「棚宮佐奈です」

世間様用の穏やかな笑みを浮かべてみせる佐奈。

本性を知っている俺としてはこのお嬢様然とした笑顔に吹き出す所だったが、『口閉じてろ』とばかりに無言で視線を投げられては溢れる笑いを堪えるしかない。

素の佐奈を知らない修一が気の毒にも騙されて照れている。

「ご愁傷様。骨は拾ってやる。……残っていれいな。」

「ー宗也さんが遠い目をしています」

佐也香の声がしてベッドを振り返る。俺と同じ艶やかな黒い瞳とぶつかった。

どつやら起こしてしまったらしい。

「具合はどうだ？」

「少し胸がもやもやします」

気分は良くないらしい。

校内を見て回るのは後日に回して早く帰って休ませるべきだろう。

「校内見物はまた今度だな。宗也達の家は近いのか？」

修一が腕を組みながら聞いてくる。

徒歩で三十分程だと伝えると渋い顔で唸った。

「倒れた女の子に歩かせる距離じゃないな」

「大丈夫だ。今からタクシーを呼ぶ」

ベッドの傍らに佐也香の鞆があるのを確認し、俺は携帯を取り出す。

そんな俺を横目に見て佐奈と修一が顔を見合わせた。

「過保護だな。これも何かの縁だし、持ち合わせが足りない時は出すぞ？」

修一の申し出は断って、気持ちだけでもらっておく。

会った初日に金を借りるほど面の皮は厚くない。それに発明品で儲けた金もある。

「美少女に借りを作るチャンスだと思ったんだがな」

悪戯小僧のように笑う修一。気の良い奴だ。

聞けば彼の家は隣町らしい。我が家に近ければ一緒に送ろうと思ったのだが、定期券を掲げて辞退された。

「それじゃ、俺は帰るよ。同じクラスになれると良いな」

さわやかな笑顔を浮かべて修一は保健室を出て行く。

佐奈は作り笑顔でそれを見送り、彼が廊下に出て扉を閉めるなり素に戻った。

「裏の見えない好青年ね」

「普通、裏がないって言わないか？」

「裏がない人間なんて滅多にいないよ。それより、タクシーはすぐに来るの？」

「ああ。佐奈は佐也香を頼む。鞆は俺が持つから」

微妙に足取りがおぼつかない佐也香を任せて俺は二人の鞆を持つ。計三人分の鞆だが、今日が入学式であるのが幸いして大した物は入っていない。

道は空いているらしいから、裏門で待っていればすぐにタクシーも来るだろう。

裏門に人影はまばらだ。新入生は皆、表門で記念撮影に勤しんでいるから当然といえば当然か。

裏門を使っているのは式を手伝った上級生がほとんどを占めている。時折、俺と佐也香を見比べる者もいるが、声を掛けてくる強者は居ない。

行き交う上級生を観察する。時々、生徒会長と副会長の噂話が聞こえてきた。結局、会長達は登校しなかったらしい。

待つこと数分、タクシーが裏門に止まってクラクションを鳴らした。

先に佐也香を乗せていると上級生達がこちらを見て何事か囁き合っている。

「ブルジョア代表？」

「新入生代表でしょ」

「本当に双子だよ」

「可愛いな。俺は姉の方で」

「どっちが姉だよ？」

……。

佐也香を狙っているらしい上級生の男子を思い切り睨みつける。

「やっべ、目があった」

「馬鹿、俺と目があったー」

少々乱暴に扉を閉めて上級生共の勘違い発言をシャットアウトする。

タクシーの運転手に睨まれるたのは無視して行き先を告げる。

勘違い馬鹿に告白されない内に俺が男だと校内に知らしめる必要がありそうだ。

ついでに悪い虫を駆除しておかねば。

言っていないよね？

自宅に帰り着いた頃には佐也香の体調も回復していたが、大事を取って休ませる事にした。

倒れるなんて初めての経験だから本人も不安だろう。

佐也香をベッドに寝かせて、俺と佐奈は彼女の部屋を出た。

「……それでどうするの。エンジェルブラッド天毒血でも飲ませておく？」
「その名を口にするな」

ちなみに、エンジェルブラッド天毒血は栄養剤である。貧血に効果抜群な医薬部外品として売れている。

その酷いネーミングの割に効果が高いことからネット上で話題を呼び、急速に広まった俺の発明品だ。

「とりあえずアレを使うには及ばない。ちゃんと食事を採ればそれでいい」

「別にアレなんて言わなくても良いでしょ。エンジェルブラッド天毒血はエンジエー」
「やあめええろおお！」

俺の悲痛な声を楽しむように佐奈はニヤニヤと笑っていた。

くそつ。楽しんでやがる。

佐也香の部屋の前で騒いでいては邪魔になるので、佐奈にいじられながらも一階に降りてリビングに入った。

ソファーに座る佐奈にお茶を出し、幼なじみ故の気安さで隣に座る。

お茶を一口飲んで俺は口を開いた。

「実際、佐也香が人に囲まれないように配慮する必要はあるな」

佐奈が無言で頷きを返した。

彼女は両手で持った湯呑みを無意味に回している。

「ファンクラブのこと聞いた？」

「ああ。意外と早く馴染めそうだと期待したんだが、落とし穴があったな」

向こうにも悪気はないだろうし、ファンクラブの会長にでも渡りをつけて活動を控えてもらうか。

佐也香が倒れたことが広まれば活動を自粛してくれる気もするが、腫れ物に障るような扱いになっても困る。佐也香は人混みに慣れていないだけで病弱ではないのだから。

「佐奈はファンクラブの会長が誰かわかるか？」

佐也香を囲んだ連中に混ざっている可能性が高いと思い、水を向けると佐奈は渋い顔をして首を横に振った。

明後日の登校日に探し出すしかないようだ。

「宗也こそ、ファンクラブに囲まれなかったの？」

佐奈が何故か睨みながら聞いてくる。

俺は校長と一緒に仲良く正座して説教を食らっていた事を伝える。

「……初日から楽しそうじゃなかったね」

楽しいものか。夜叉か般若か分からない婆さんが顔だけ笑って延々と説教してくるのだ。今夜の夢に見そうで恐ろしい。

「『逝くが良い混濁する世界の果てへ』でも使いなさいよ」

だから止めろってんだ。

名前どころか文になっているのは安眠枕の商品名である。既にタンスの中に封印済みだ。解き放つつもりはない。

いや、佐也香に渡しておくのは良いかもしれない。不安な時は嫌な夢を見るものだ。

立ち上がった俺に佐奈がクスクスと笑う。

「本当に過保護ね。佐也香が生まれる前の宗也からは想像もつかない」

「何を言う。俺は昔から優しい天才発明家だ」

「はいはい。私は佐也香の寝顔でも見て帰るよ」

より一層笑いを深めながら佐奈は佐也香の部屋に入っていった。

俺は自室の扉を開けてタンスを漁る。

隣接する佐也香の部屋から話し声が聞こえてきた。あの二人は仲が良いようだが、どんな話をしているのだろうか。

タンスの奥に封じられていた枕を取り出す。

相変わらず癖になる感触だ。青地に頭だけの黒ウサギが乱舞している柄なのが残念な気持ち誘う。佐奈の趣味はよくわからん。黒ウサギの頭だけって、これじゃあ死んでるだろ。

うん？ 枕だから良いのか？

……とりあえず佐也香の好みに任せよう。嫌がったら枕カバーだけ変えればいい。

この柔らかく適度な温度を維持し、鎮静作用を有する香りを発する枕の誘惑に勝てるはずはない。頭を乗せた瞬間に夢の世界に住民票を移す事になるだろうさ。

「くっくっくっ。逝くが良い混濁する世界の果てへ」

いかん。こつちの封印も解かれた。静まれ俺。

大きく深呼吸し、再封印を施した俺は件の枕を持って佐也香の部屋に向かい、ドアを開ける。

「佐也香。枕、持ってきー」

最後まで言い切る事が出来なかったのは俺の顔に佐也香が使っている低反発枕が飛んできたからだ。

当たった俺が思わず仰け反るほどの速度と威力だった。

運動エネルギーを失った枕は床に落下を開始する直前、何者かの蹴りによって再びエネルギーを与えられ、俺ごと廊下に弾き出された。

「着替え中よ、外に出てなさい！」

壁にもたれて座り込む俺に佐奈の声が降ってきたかと思うとドアが乱暴に閉めらる。

そういえば、佐也香は制服のままだった。パジャマにでも着替えているのだろう。

ちっ、見逃した。

着替えイベント、お約束のはずだろう。何で見えなかったんだ。

本気で悔しい。このままでは殴られ損ではないか！

そうだ。ドア一枚向こうで女の子が着替えている。例え顔が俺に似ていようが関係ない。これは男の問題なのだ。

「……立ち上がれ、俺」

体を壁から離しゆらりと四肢に力を入れる。

この天才の頭脳を持ってすれば女の着替え姿の一つや二つ、簡単

に拝めるのだよ。

くつくつくつ。佐奈よ。貴様は大変な物を盗んでいった。それは俺のプライドだ。取り戻さねばならん。

完全に立ち上がった俺は力強い一步を踏みしめる。そして夢の世界を隔てるドアノブを掴むために手を伸ばした。

しかし、夢溢るるそのノブは何者の策略によるものか、部屋の中へと引き込まれていく。

つまり、扉が開いたのだ。それは着替えが終わった事を示しているわけー

「ー宗也、入っても良いよ」

「何故だ!？」

夢敗れて叫んだ俺に佐奈が困惑する。

「何故つて言われても……。」

「佐奈はいつもそうだ！ 期待も希望もあっさり踏みにじる。振り絞った勇気も覚悟もにこやかに叩き潰す。同じ人間のする事かよ……。お前の遺伝子は何対だ!？」

佐奈が俺を廊下に蹴り出さなければ、こんな事にはならなかった。俺がプライドを失う事もなく、お約束という大義名分の下に制裁を受けて八方丸く収まったというのにー

「佐奈、お前はなんて事を……。」

涙声を残し床に膝を突く俺に佐奈は混乱している。

何が起きたのか全く理解できていないのだろう。ある意味仕方が無い。

そんな佐奈の背中ごしに佐也香が顔を覗かせた。

「お二人とも、何を？」

「……。何かノリで馬鹿げたことをしていた気がする。それはそうと佐也香に俺の発明品たるこの枕をやるう。安眠熟睡を約束する」

何事もなかったかのように立ち上がり黒ウサギの頭が乱舞する柄の枕を佐也香に手渡す。

彼女は首を傾げつつ、枕の感触が気に入ったのか両手でムニムニと揉んでいる。

いつも無表情な彼女の口元が少しばかり柔らかくなっていた。

「喜んでくれたようで良かった。何か問題があれば改良するから何時でも言えよ」

「はい。ところで佐奈さんがお怒りのようです」

「柄が気持ち悪いなら枕カバーだけ変えても良い」

「はい。それより佐奈さんがお怒りのようですが？」

「そのパジャマも可愛いな。猫を模してるのか」

「はい。ときに佐奈さんが大変お怒りのようです」

三回も言われた。しかも、最後だけ『大変』なんて言葉が付いてる。

怖くて横を見れない。

「私は帰るけど、宗也、見送ってくれるよね？ 佐也香の部屋を汚したくないのよ」

……。何で外を汚す気だ？

俺は肩に食い込んだ佐奈の右手に逃げることも叶わず、外へと引きずられる。

佐也香が「野辺送り？」と呟いた。俺は「お見送り」に逝くだけ

だ。我が人生の。

「佐也香は寝てなさい」

佐奈が振り返って佐也香を指差し、念を押すように言った。見送りに出る気だったらしい佐也香が悩む素振りを見せるので俺からも大人しく寝ているように言っておく。

「分かりました。」

表情を変えずに頭を下げて佐也香は部屋に引っ込んだ。無言で廊下を進む佐奈に連れられて玄関を出る。

彼女は外から佐也香の部屋の窓を見て何かを確認すると俺に向き直った。

「宗也にちよつと話があるのよ」

「そんな事だろうと思った」

本気で俺を血祭りに挙げるなら場所を選ばずやる女だ、こいつはわざわざ俺を外に引っ張ってきたのは佐也香に聞かれたくない話をするからだろう。そう思って先程も話を合わせた。

「それで、何の話だ？」

聞く姿勢を作ると佐奈は珍しく考えながら話し始めた。

「まさかと思うけど、佐也香に不良品とか失敗作とか言っていないよね？」

なんだそれ。

「俺がそんな事言っわけないだろ」

つい、不機嫌な声が出てしまい、片手を突きだして待ったを掛ける。

「……悪い。とにかく、言ってない。何でそんなことを聞くんだ？」
「今日、佐也香が倒れたでしょ。それで迷惑かけたってあの子が気にしてるのよ」

「そんなこと気にしてるのか」

律儀というか何というか。

そもそも何故、佐奈に相談するんだ。直接言えばいいだろう。

「そうか、教えてくれてありがとな。明日は休みだし、あいつに何か手伝わせて自信をつけさせるとしよう」

「そうしてあげて。私じゃ相談に乗るしかできないから」

そう言って、佐奈は帰っていった。「頑張れ、お兄ちゃん」とか
らかい半分の励ましを残して。

何を作る気？（前書き）

コメディ物というにはギャグが少ない気がしますので、ジャンルを学園に変更しました。

現在の雰囲気を変えるつもりはありません。

何を作る気？

佐也香に自信をつけさせる。

言葉にするのは簡単だが、具体的には何をさせればいいのかだろうか。

落ち込んでいる女の子を励ます方法とかネット検索かけてみようか。

しかし、気を使っているとバレたなら、佐也香はますます落ち込むだろう。

下手なことは出来ないな。

ううむ、安請け合いしてしまった。

あれこれと考えつつ、リビングに戻る。点けっぱなしのテレビから漏れる音声を聞きながら、冷めたお茶を胃に流し込む。

明日の実験を手伝わせようかと考え、自ら却下する。

実験内容は俺と佐也香の遺伝子を検査するというものだが、ほとんど機械任せな上に時間がかかる。手持ち無沙汰に機械を眺めて自信回復もないだろう。

「うう……む？」

背後に人の気配。

この天才が思索に耽る様子に声を掛けられずにいるのか。空気の読める愛らしい奴である。

振り返ってみると、佐也香が俺をいつもの能面顔で見つめていた。

「宗也さん、夕食はどうしますか？」

「そうだな。母さん達は遅くなるし、今から作り始めても良いか」

早めに食べて佐也香を寝かせしまおう。

佐也香は俺の言葉にこくりと頷き、エプロンを手に取った。

「ち、ちよっと待て。佐也香が作る気か？」

「……はい」

可愛らしく首肯する佐也香さん。実年齢二週間。

佐也香は料理の知識はインプットされて人並みだが調理スキルは絶望的である。体の使い方が未だに上手くいってないからだ。

本来なら寝返りからハイハイを通じて二足歩行に到り、体の使い方を自然に習得していく。しかし、誕生前に教育プログラムでインプット済みの佐也香はその過程をすっ飛ばしている。

ただし、教育プログラムは男性であるという想定で作られていた。当然、弊害として佐也香は認識と肉体の筋力に差が生じている。

そんな彼女に包丁を持たせるのは正直な所、怖い。

十分な力で掴んだと思っていた包丁が肉体の筋力不足で滑ったりしそうだ。

だから、俺が夕食を作ると提案するつもりだった。

——佐也香が伏し目がちになりつつも、表情を繕っているのに気付くまで。

「はぁ……。いいか、力は少し強めにいれつつ注意してやるんだ」

止めないのが意外だったのか、佐也香は俺の瞳をまじまじと覗き込んできた。

「……作る気なら早めに頼む」

照れ隠しに佐也香を急かすと、不思議そうに俺を見ていた彼女は台所に向かった。

その後ろ姿に胸をなで下ろす。どうやら気を使ったことはバレて

いないらしい。

人生経験を積んでいないから人の機微には疎いのだろう。

これで少しは自信を取り戻してくれると良いのだが。

ガリガリと米を研ぐ音を聞きながら、俺は密かに溜め息を吐く。

夕飯の米は細かくなっていそうだ。消化に良くて万々歳だな。

危なっかしい佐也香を見守りながら俺は明日の予定を組み立てる。

実験は延期にして、明日は佐也香と外出しよう。料理本なんかを

買ってやりたい。

幸か不幸か両親は頻繁に家を空けるため、佐也香が料理する機会

は自然と増やせる。

家の仕事を任せる事で自信も回復していくだろう。

そして、俺は毎日女の子の手料理が食べられる訳だ。

一石二鳥、天才とは一動作で複数の利益を手に入れる者を言うのだ。

「くっくくく」

「宗也さん」

「なんだね？ 天才の知恵を借りたいのかね？」

貸してやろう。特別に無料だな。

「包丁はー」

「押しても引いても切れるぞ」

先回りしての解答。定番過ぎて最後まで聞く必要もない。

「包丁は切る道具なんですね」

「そこからかよ!？」

基本事項ですって。むしろ切る以外にどんな用途で使ったもりだ

ったの？

「ニュースで使い方を知りました」

……そう言えば通り魔がどうとか言ってたな。

「って、それ一般的な使い方じゃないから！ やっちゃいけない使用法だから！！」

法律知識とかインプット済みで助かった。包丁片手に家を出て行く事になりかねん。

肉は外で調達って、市街地でどんなサバイバルする気だよ。

佐也香は納得顔で調理を再開した。タマネギが少しずつ切られていく。

流石に包丁の刃を上にするような事はなかったか。

俺が安堵のため息をつく頃には次の工程に移行していた。

佐也香が棚からおもむろに取り出したのは中華ナベと木べらである。

彼女はしばし考え込むと中華ナベを、被った。

「……違いますね」

「自ら気付いてくれて何よりだ。中華ナベは安全第一なヘルメットじゃない」

さては漫画で仕入れた知識だな。

「中華ナベは盾で木べらは打撃武器ですね」

「どっちも違うから！ そもそも君は何と戦ってるの！？」

料理してたはずだよな。

そこで細かく刻まれたタマネギとかニンニクとかでチャーハン作るんだよね？

それとも全部俺の早とちりだったのか。

「後は血を垂らして錬成陣を描けば料理人を錬成できます」

「真理君が出てくるからだめええええええ！」

「失敗しても打撃武器と盾があります」

「使い方違っつてば！」

何で自信ありげなの？ 無表情のはずなのにやる気で輝いて見えるんですけど！？

「兄である宗也さんは天才です。成功するはずですよ」

「確かに、天才だけでも！ 柏手打って何でも作れたりしないから！！！」

「最初はそうです。失敗した後にはそれが出来るんです」

「失敗を前提にしてるよね？ とにかくやめて。自分で料理作って、料理人は造らなくて良いから！」

「そうですね。人体錬成は完成品がありますし」

自己紹介乙。

ようやくこのポケとツツコミの応酬をやめてくれるらしい。

正直疲れたぞ、おい。

「お腹が空きましたか？」

「……まさか、そのために今の会話が！？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0121ba/>

どっぺる!?

2012年1月11日01時50分発行